

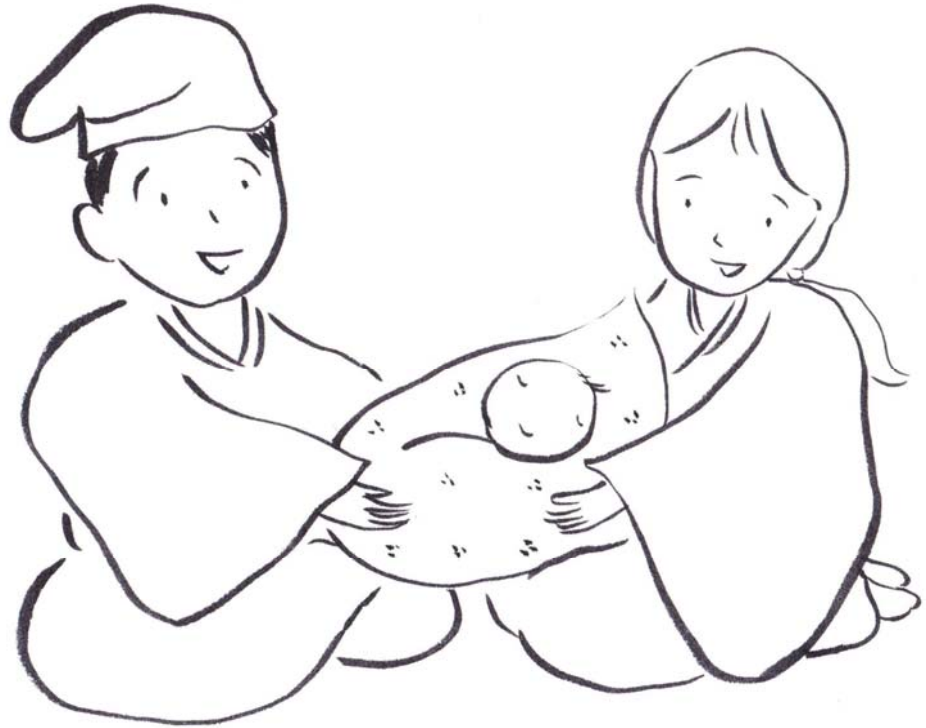
おかまじぞう
お釜地蔵

こうにん ねんごう
弘仁の年号ということですから、今から
せんにひやくねん まえ
千二百年ほども前にあたる平安時代のお話です。
おわり くに こおりむら こうなんしこおり ひやくしやう
尾張の国は小折村江南市小折江に、お百姓の
わか ふうふ なか
若い夫婦がとても仲むつまじく暮らしておりました。

ふうふ すうねん こだから めぐ
ところが、この夫婦は数年がたつても子宝に恵
まれず、どうしても子どもがほしいとの願いをこめ
のらしごと い かねら つじごう じぞう
て、野良仕事の行き帰りには、必ず辻堂のお地蔵
さまにお参りをつづけておりました。そのうちのこ
とです。夫婦の願いはかない、玉のような男の子
ふうふ ねが おおよろこ つねまる なまえ まいにち
がさずかって大喜び、常丸と名前をつけて毎日
せいちやう たの よる
の成長を楽しんでおりましたが、ある夜のこと、

つま こうねつ だ かんびやう
妻はとつぜん高熱を出して、看病のかいもなく
ふつかご な
二日後には亡くなってしまいました。

こ ちい ちち こ せいかつ
子どもはまだ小さいし父と子だけの生活ではと、
きんじよ ひと ごさい
近所の人のすすめにより後妻をもらいました。初
めのうちは何事もなく過ぎていききましたが、日
つねまる わんぱく ままはは
たつにつれ常丸はだんだんと腕白になり、継母の
て あま ちちおや つねまる
手に余るようになりました。それでも父親は、常丸
のすることをとがめることなく可愛がるので、
ままはは きい かわい つねまる かお
継母には気に入りません。それどころか常丸の顔
み
を見るだけでもにくたらしくなって、することなす
て あ なまきず ま
ことに手を上げ、いつも生傷のたえ間がありません
んでした。
ごがっ は ひ つねまる
五月のよく晴れた日のことです。常丸はもう
よんさい ちちおや はたけ
四歳になっておりました。父親が畠でとれた



野菜やさいを持って黒田くろだの市いちへ行商ぎょうしょうに出かけて留守るすになつたとき、鬼おにのようなおそろしい心こころとなつた
ママママはは つねまる ふろがま い にころ おも
継母おとこは、常丸つねまるを風呂釜ふろかまに入れて煮殺おぼそうと思おもいた
ち、やさしい声こゑで常丸つねまるを呼びよせると風呂ふろに入れ、
蓋ふたをすおると大きな石いしをのせて、外そとの焚たき口ぐちからど
んどんと火ひを焚たきはじめました。
いっぽう ぎょうしょう で ちちおや へん むな
一方、行商ぎょうしょうに出た父親ちちおやはなんだか変へんに胸むなさ
わぎがするので、途中とちゆうから引き返かえしてきました。
ふろ ふた うえ おお いし ふしぎ
風呂ふろの蓋ふたの上に大きな石いしがのつているので不思議ふしぎ
に思おもい、中なかをのぞいてみると、ただ湯ゆがぐらぐら
と煮にえたぎなつております。どうなつてつじどういるのほうだろう
ととまどつてつねまるいるところへ、辻堂つじどうの方ほうから常丸つねまるが
裸はだかでとんで来て今いままでの出来事できごとを話はなしました。
そしてもうだめかと思おもつたとき

「たすけてー。アツーイ。たすけてー」

必死ひっしになって大声で叫ぶと、風呂ふろの蓋ふたが浮いて
辻堂つじどうのお地藏じぞうさまの両手りょうてが見え、常丸つねまるをすくい出だ
して助けて下くださったんだというのです。

これまでのいきさつをいつの間にかそばで聞き
ていた継母ママは、自分の行なった罪つみの深ふかさを知しり、
お地藏じぞうさまの尊とうとい御心みこころにやつとふれて

「私がすべて悪わるうございました。今までの罪つみほろ

ぼしを致いたします」

そういうと両手りょうてを地面じめんについて、深々ふかふかとあやま
りました。そしてその後、継母ママは頭あたまの髪かみをそり
おとすと尼あまさんになり、お地藏じぞうさまと風呂釜ふろがまをも
らい受うけて地藏庵じぞうあんを建たてる、そこで生涯しょうがいを奉仕ほうし
したといわれております。



このお話はなしがいつしか世間せけんに広ひろまると、こんな
尊とうといお地藏じぞうさまのことですから、みんなは「お釜かま
地藏じぞう」と呼よんでお願いねがいごとにお参まいりするようにな



りました。

かまくらじだい はい かまじぞう

鎌倉時代に入るとお釜地蔵は、そっくりそのま

にんげん おな おお てつ かまじぞう か

ま人間と同じ大きさの鉄のお釜地蔵に変えられ、

まえ じぞうどう た

前よりもりっぱな地蔵堂が建てられて、ますます

ひょうばん たか

評判が高くなりました。

ひやくすうじゅうねん

それから百数十年ほどもたったでしようか、

かまじぞう けいだい おううんざんじょうかんじ た

お釜地蔵の境内に桜雲山常観寺が建てられ、そ

いこう じょうかんじ かまじぞう ひ

れ以後は、常観寺のお釜地蔵として引きつがれて

なが としつき あいだこ

きました。このように長い年月の間子どもをお

まも くだ かまじぞう きゅうしようがつ

守り下さりつづけたお釜地蔵は、旧正月の

にじゅうよつか きゅうしちがつ にじゅうよつか めいにち

二十四日と旧七月の二十四日のご命日には、子

う おお ひと たい

ども連れの多くの人たちが大へんなにぎわいをみ

こんにち おわりろくじぞう ひと めいせい

せ、今日まで尾張六地蔵の一つとしてその名声は

き

消えることはありません。